

ヘロー天気

HERO TENNKI

ワールド・カスタマイズ・
クリエーター

主な登場人物

田神悠介 たがみゆうすけ III・C・C

本編の主人公。
災厄の邪神として召喚された。ゲームのシステムが元となった能力「カスタマイズ・クリエイト」を操る。

III・C・C
エスヴォブス・
ヴォイラス十八世

えんへきおう
『炎壁王』の異名をとる、炎技の民にしてフォンクランクの王。ヴォレットの父親。

III・C・C
ゼシャルド

ひょうひょう
飄々とした雰囲気の水技の民。四百年に一度現れるという邪神の研究をしている。

III・C・C
ヴォレット・
ヴォイラス

炎神の末裔といわれるサンクアディエットの王族。
わがまま
少々過激な行動を取る我侫姫。

III・C・C
レイフォルド

つかみどころのない風技の民。悠介の元に現れては消える謎の男。

III・C・C
スン

ルフク村出身の無技の民。ゼシャルドの医療活動や邪神研究の手伝いをしていた。

プロローグ

「この辺りのバランスが悪いんだよな、このクソゲーめっ」

そう悪態を吐きつつもプレイを止められない彼は、ポータブルゲーム機のボタンをぼちぼちと押しながら裏山にある古い神社の境内を歩いていた。

彼は参拝する目的でここに来た訳ではない。家では母親が「またゲームばかりして！」とうるさいので、人気が無く静かで快適にプレイ出来る環境を求めるうちに、この場所が定番になったのだ。「くそ、折角手に入ってもポイントが足りないから弄りようが無い……こうなったらチート使うか」

プレイ中の画面に映る3Dで描かれたアイテムをカーソルで動かしながら、彼は『最終手段』の使用を考えていた。

手に入れたアイテムを、好みのステータスに変更して使えるシステムが売りのRPG。

ゲームの内容自体はオーソドックスな冒険活劇風の有り触れたモノだったが、このゲームの売りであるアイテム・カスタマイズ・クリエイトシステムは中々のやり込み要素があつて、彼をこのゲームにハマらせている要因でもあつた。

しかし、明らかにバランスを間違えた自由度の低さが、多くのプレイヤー達からブーイングを呼んでいる。

その為、ある程度ゲーム歴も長く真つ当なプレイ以外の方法を知るプレイヤーの中には、直接ゲームのデータを変更してしまう、いわゆるチートコードを利用する者もいた。

チートコードは、パソコンのゲーム等なら予めそのゲームソフト本体に組み込まれていて、特定の手順を踏む事で誰にでも利用可能になっているモノもあるが、ゲーム機専用ソフトの場合は殆どが非公式なツールを使う事で本来の動作を外れたプレイが可能になる。

これらチートツールの利用に関しては多くのゲームユーザーからも賛否両論の意見があり、グレーな扱いとなつている。しかし、普通にプレイしては出来ない事が出来るという点で、ただ楽に遊びたいライトユーザー層から、そのゲームを遊び尽くしたいヘビーユーザー層まで、利用者は後を絶たない。

彼もまた、そんなヘビーユーザーの一人である。

そして、よくあるアクションゲームからRPG、パズル物、推理系アドベンチャー、はたまたギャンブルゲーと呼ばれるノベル系など、特に偏る事無く『ゲームその物を楽しんでいる』ゲームでもあつた。

手広く色々なゲームをプレイしていると、必ず何度かは『クソゲー』と評されるモノに触れる機会がある。

内容は面白いのにシステム面が酷いモノから、単純に内容が酷いモノなど、一部で熱狂的なファンを持つ事もあるクソゲー。

このアイテム・カスタマイズ・クリエイトシステムがウリのゲームもまた、内容は面白いのにシステムバランスが悪いせいでクソゲーの烙印を押されている。

彼がこのポータブルゲーム機で使える最終手段。非公式ツールであるディスクを取り出そうと、カバンに意識を向けたその時――

――来タレ邪神ヨ――

頭の中に声が響き、同時に身体を引きぬかれるような感覚が全身を襲う。

『な、なんだっ!』

突然の浮遊感に、階段辺りで足を踏み外したかと身を竦ませた彼は、思わず頭を庇いながら自分の足元に視線を向けて唖然となった。自分自身がそこにいる。頭より少し高い位置から自分の後姿を見下ろしているのだ。

『うおっ幽体離脱か! ……いや、なんか変だぞ?』

高い位置から見下ろす自分自身は、何かに驚いたように周囲をキョロキョロと見渡している。やがてゲーム機を鞆に仕舞うと、首を傾げながら足早に去って行った。

『なんだこれ……一体どう……なっ……て——』

視界が水の中のように揺れて徐々に暗転していき、朦朧とする意識の中、彼は星々に囲まれた宇宙のような暗い空間に浮かぶ巨大な皿と、その上に広がる広大な大地を見たような気がした。

『……象と亀は……居ないんだな……』

◇◇◇

その大地は、世界と世界の狭間に存在していた。全天に見渡せる星々のような輝きは、その一つが狭間の世界から見える沢山の異なる世界。星の数ほどの異世界と繋がる狭間の世界に、ポツ

リと浮かぶ巨大な円盤状の大地。

そこに住む人々はこの大地を『カルツイオ』と呼び、国を建て、繁栄し、衰退し、滅び滅ぼし、子を産み育て、連綿と続く人の営みによって悠久の歴史を紡いでいた。

カルツイオに住む彼等が大地を飛び出し、この世界の全貌を知るには、まだこの先数万年の時が必要であった。

そんなカルツイオの歴史を見守り続ける、この世界の始まりから存在する『意思』がある。

この世界の神とも言えるその存在は、世界の維持と循環を促す為、定期的に異なる世界から使者を喚ぶ。

異なる世界からの来訪者は、カルツイオの大地に様々な波紋を呼び起こし、停滞を打ち溶かして新しい流れを作り、世界の循環に貢献する。

ある時は、巨大な体躯を持った『竜』と呼ばれる存在。ある時は、人間から見ると異形と形容される姿の『怪物』などが喚ばれ、彼等はこの世界の神たる存在に与えられた力を以って世界の循環に大いなる貢献を果たした。

今回もまた、世界に循環を促す時期が訪れた事に伴い、この世界の神たる存在は異世界からの来訪者を喚ぶ。

——来タレ邪神ヨ——

無限とも言える程に連なつた異なる世界。数ある異世界の中から喚ばれたのは、人間型の若い男だった。

上も下もない、身体感覚もない、何か温かい気配に満たされた空間を漂う不思議な感覚の中で、僅かな意識が知覚する、包み込むような大きな存在が語り掛ける。

『……なんだ』

——汝ノ望ム姿ヲ示セ——

『姿……？ 俺の姿……』

自分の姿が思い出せない彼は、曖昧に揺らぐ記憶を手繰り寄せようとする。自分が何者なのか、どこで何をしていたのか、最も近い記憶にある自分の姿。

——汝ノ望ム力ヲ示セ——

彼が思い浮かべた力は、今までに喚ばれた者達には見られ無い一風変わったモノだった。殆どの来訪者は、敵を打ち倒す強大な力や、永遠に続く生命を望んだ。

尤も、強大な力を望んだ者はやがて老いて打ち倒され、永遠の生命を得た者は繰り返し返される離別を嘆いて自ら生命の終焉を選ぶことになったのだが。

——汝ノ望ム力ヲ与エヨウ——

異世界の若者から引き抜かれた『その若者の意思』は、カルツイオの大地に肉体を得て光臨を果たした。

キンコーン

頭の中に響いたチャイムに、田神悠介は朦朧としていた意識が鮮明になって行くのを感じた。

「さむっ」

ひんやりとした冷たい空気にもぞりと身体を動かすと、背中や尻に触れるゴツゴツとした石の感触。

思わず目を開いて周囲を見渡す彼の視界に飛び込んで来たのは、揺れる篝火とその明かりに照らし出された石室のような空間だった。身体を起こして異常がないかを確かめると、改めて周囲を確認する。

どうやら石の台座のような場所に寝かされていたらしい。何故か素っ裸であった。台座の正面には、人間のような怪物のような何だかよく分からない形をした禍々しい雰囲気、黒っぽい像が飾られている。

「なんじゃこりゃ……なんかの儀式か？」

自分の身に何が起きたのか分からない悠介は、慌てるよりも恐怖するよりも、まず情報と着る物を欲した。

長方形の箱型をした高さ一メートル程の石の台座から下りる。すぐ傍に小さいテーブルのような台があり、その上に蜜柑に似た果実っぽいモノと少し萎れた色とりどりの花束、それに衣服らしき織物が並べられている。

まるで祭壇に捧げるお供えモノのようだった。小さな台もやはり石で出来ていて、台座や祭壇共々相当に古いモノらしく、表面に風化の跡が見られる。

「つーか、お供えモノ……なんだろうなあ、これ」

若干の迷いはあれど背に腹はかえられないと、怪しげな祭壇の像に手を合わせて織物に手を伸ばす。とりあえず素っ裸は落ち着かないのだ。と、悠介が少し黄色にくすんだ白い衣服らしき織物に触れた瞬間――

キンコーン

「！っ」

頭の中にチャイムが響き、驚いて手を引っ込める。先ほど目覚めた時も聞こえた音だった。祭壇を振り返って見るも、特に変わった様子は見られない。もう一度石室内を見渡し、異常が無い事を確かめてそっと織物に触れた。

今度は何事も起きず、織物を手にした悠介は首を傾げながら周囲を気にしつつ、白い衣服を広げてみる。

「女物のワンピース、じゃないよな？」

首と腕を通すのであろう縁取られた穴が三つ並んでいる他は、至ってシンプルな布地。布団のシートに穴を開けて被るようなイメージが湧く。

「照る照る坊主じゃあるまいし……」

腰紐らしきモノをベルトのように巻くと、映画などで見た事のある古代人っぽい風貌になった。衣服を身に纏った事で人心地ついた悠介は、意識が朦朧とする直前の事を思い出す。

「夢——って訳でもなさそうだ」

篝火に照らし出される石室の低い天井を見上げ、そこに描かれた天井画に強い既視感を覚える。大昔の人々が想像した世界図のような、丸い円盤状の大地に海や山が広がっている。

「……なんだろうな……？ 変な声が聞こえて、身体が浮いて……その後に見たような気がするけど」

声というよりも言葉、伝達内容の意思そのモノが直接飛び込んで来たかのような不思議な感覚。その後、境内から足早に立ち去る自分自身の姿を見送り、そこからの記憶があやふやだった。

悠介は一つ溜め息を吐くと、椅子代わりに座っていた台座から下りて石室の出口に向かう。正面に見える扉の付いていない出入り口の前には、狭くて暗い通路が続いていた。

石室を出てすぐ右に延びる通路は、少し進んだ所で左に折れているので、先がどうなっているのかここからでは分からない。篝火から松明代わりに火のついた木片を引っ張り出して通路に翳す。

木片に触れた時、再び頭の中でチャイムが響いたが、悠介はなるべく気にしないようにした。

不思議と不安や恐怖は湧かない。突然の超常現象的な不思議事態で、精神的な麻痺状態にあるという雰囲気でも無く、心の奥底でどこか納得しているような感覚。悠介は自分の気持ちにそんな部分がある事を感じ取っていた。

真っ白な髪を風に靡かせながら小走りに駆ける少女が、村から少し離れた森にある祠へと続く小道に行く。

「スン、祠に行くのかね？」

「あ、ゼシャールド先生」

色とりどりの花と、もぎたてのララの実を抱え、森に向かおうとしている村娘のスンに声を掛け

る老齢の男性。ゼシャルドと呼ばれた彼は、この近くにある『ルフク』という村で村医者をやっている。

加齢によりくすんでいるが、その青髪と青い瞳は、彼が『神技人』であり『水の神…シャルナー』の加護を受ける『水技の民』である事を示していた。

神技人――

『神技』と呼ばれる特殊能力を持つ四大神の民。この世界に住む人々には四大神信仰が定着しており、この世は『炎』『水』『土』『風』を司る四柱の神によって創られたものとされていた。

大多数の人々は、それぞれの神から加護と祝福を受けた証として『神技』を宿している。基本、一人に付き一柱の神技が宿るとされ、神技を宿した人間には加護を受ける神からの影響が、髪や瞳の色にも濃く顕れるのだ。

ゼシャルドは四大神の中でも二番目に神格の高い『水の神…シャルナー』の神技を宿す中等神民である。神技も治癒系の熟達した水技を扱えるので、神技人の街に住めば相当に贅沢な暮らしが出来る程の実力者なのだが、彼はいわゆる変わり者であった。

「先生、また新しい文献ですか？」

「うむ。今度はノスセントスの古い祠にあった物らしいんじや」

「その祠も、やっぱり無技の村に……？」

「いかにもじや。やはり邪神と無技人には何らかの関係がありそうじやなあ」

――無技人とは、文字通り『神技』を宿していない者の事を指し、彼等は神技人達によって明確に区別されている。

神技人達は『等民制度』という神格の違いによる身分の差異はあれど、四大神の民として共に一つの街で暮らしている。しかし無技人達は一部の例外を除いて神技人の街に立ち入る事が出来無い為、街の周辺に集落や村を形成して暮らしていた。

一般的に無技人達が集まって暮らす村を『無技の村』という。そして各地の古い無技の村には『無技の祠』と呼ばれる謎の祠が幾つか残されていた。それらの祠を研究する者達からは禍々しい像が祀られる祭壇を指して『邪神の祠』とも呼ばれていた。

『邪神』とは、古くからカルツイオに伝わる『災厄の邪神』を指す。

言い伝えでは、およそ三百年周期でカルツイオに災厄が訪れるとされており、今年はまだに三百年目に当たる年であった。

但し、前回の災厄も『災厄の邪神』も全て言い伝えであり、三百年前当時や更にその三百年前の状況が記された詳しい資料等は残されていないため、識者の間では半数以上の割合でただの迷信であると認識されている。

「邪神ですか……ほんとにそんなモノが居るんでしょうか？」

「ほほっ、ワシも幾つかの言い伝えにある魔獣の始祖みたいな存在が居るとは思わんよ」

『災厄の邪神』の正体としては、自然災害や疫病の発生などを指していたのではないかと考えられている。

無技人達は怪我や病気を患っても、神技人達のように水の治癒系神技で直ちに癒すという術を持たない。その為、大規模な災害が起きたり、疫病が広がったりした場合は壊滅的な損害を被る。無技人の村に邪神の祠が多いのも、そういった災厄が村に降り掛からない事を祈る意味で、邪神に見立てた像を祀っていたのではないかという説が主流だった。

「それなら、ルフクには先生がいてくれるので邪神も怖くないですね」

「ほっほっほっ、スンはええ子じゃなあ」

うむむと目尻を下げて微笑むゼシャールドは、年季を重ねて節くれた指でスンの白い髪を撫でる。白い髪に白い瞳という特徴を持つスンは『無技人』の少女であった。この地方に点在する神技を宿さない者達が暮らす村の一つ『ルフク村』に住んでいる。

神技人と無技人の間には絶望的な程に深い歴然とした力の差があり、それは絶対的な身分の差となつて表れている。国や地方によつては無技人は亜人であるとされ、人間として認められていなかったりもするのだ。

常に虐げられる側の存在である無技人に、戯れ以外で施しを行うような物好きな神技人は居ない。そういう意味において、無技人の村に住み、無技人と同じ目線で接し、無技人達に治癒の神技を惜しみなく振るうゼシャールドは実に『変わり者』であった。

そしてスンは、そんなゼシャールドの事を神技人の医者としても、一人の人間としても尊敬していた。

「それじゃあ、御供えの替えに行つてきますね」

「うむ。氣いつけての」

祠に向かうスンを見送つたゼシャールドは、新しく手に入れた『災厄の邪神』に関する文献を流し読みながら、ルフク村への帰途に就いた。彼がこれまで調べた邪神に関する文献には共通する一節があった。『邪神は世界に災厄をもたらして消える』

「ふむ。これにも書かれておるな……やはり疫病の類と見るべきか」

ルフク村で村医者をやる傍ら、無技の祠についての研究もしているゼシャールドは、元々は邪神研究の為に無技の村に居を構えていた。だが、神技による恩恵の無い村人達の純朴な生活を観察する内、彼等の生きる為の知恵や努力に感銘を受けた。

神技人の街に居れば、ちよつとした小物を作るにしても、立派な家を建てるにしても、それらは生産や建築専門の神技職人によつて行われ、専門職人以外の者が手掛ける事は殆ど無い。神技の熟

達度合いが生産物、建築物の出来を左右する。

だが無技の村では一軒の家を建てるにも、村人が総出で作業を行う。木材の切り出しから土台作り、扉や屋根造り等、技術と経験を持つ者が下の者達に教えながら一緒に造り上げて行くのだ。

ゼシャルドは無技人達の互いに支え合い、助け合う生活の中に、知恵や技術を受け継がれていく様子を認め、そうした環境こそが無技の祠のような古い祠と言い伝えを後世まで残せた理由ではないかと考えていた。

「前回の災厄らしき記述と時期から推測すると……シャルナーの火月の五日目から十五日目辺り。今日は十一日目か」

三百年周期の災厄については、街でもそこそこ噂になってはいる。が、なんらかの災厄に備えて警戒するというような雰囲気は無く、至って平穏であり、酒の肴として話題にされる程度の扱いだった。

「……？ いつもより鳥が多く飛んでおるな」

何気無く祠がある森の空を見上げたゼシャルドは、自身に宿る神技の力が何かを感じているような気がした。祠に向かったスンの姿は既に見えない。

「まあ、何も無ければ無しでよし」

もう一度空を見上げ、森の上空を旋回している鳥の群を一瞥した彼は、もののついでだと祠に向

かって歩き出した。

2

ばさりっ、と少女の足元に花束が落ち、その上をララの実が転がる。見開かれた白い瞳に映る人影が何事か呟きながら手を伸ばす動作をすると、少女は恐怖に表情を引き攣らせながら悲鳴を上げて逃げ出した。

「あ、ちよつと……」

石室がある建造物の外に出られた悠介は、そこで真っ白な髪を持つ少女と出会った。そして逃げられた。悲鳴つきで。

「ちよつと話を聞こうと思ったダケなのに……」と軽くへこみながら、少女の落としていった花束と果実っぽいモノを拾い上げる。どうやら石室にあった『お供えモノ』と同じ物らしい。

「あの子がお供えをしたのか……？」

祭壇の不気味な像を思い出し、まさかアレと間違われたのでは？ と自分の格好を気にしてみたが、少なくとも祭壇にあった像のように人間だか怪物だかよく分からないような姿では無い。単に

不審者だと思われたのかもしれない。

「うーむ」

悠介は唸りながら辺りを見渡した。そこそこの高さの木々が周囲をぐるりと囲む静かな場所。木々の間は暗く、向こう側を見通せない程密集しているようだ。

ここは石室のあった建造物を中心に、森の中を少し切り開いたような空間らしい。何となく厳かにも感じる雰囲気は、神社の境内を思い起こさせる。少女が立ち去った方角には、踏み均なだされて出来たのであろう獣道のような小道が木々の間の奥へと続いていった。

「行ってみるか」

ここでじっとしていても仕方が無いと、悠介は小道を歩き出す。突然の超常現象でどことも知らない場所に放り出されるといって、現在進行形で異常事態の最中にあつたが、とにかく人に会って話を聞かなければ現状の把握もままならない。

先程の少女のような子が一人で来られる場所ならば、さほど危険も無いはずだと楽観的に考えていた。

「先生！ ゼシャールド先生ー！」

「むん？」

祠のある森に向かう小道を歩いてきたゼシャールドは、森の方から駆けて来るスンの様子を訝いぶかしんだ。

何かに追われているかの如く怯えながら、縋すがりつくようにゼシャールドの腕に飛び込んで来る。

ゼシャールドはまた街から来た不逞の輩にでも絡まれたかと、落ち着かせるようにスンの髪を撫でながら何があつたのかを訊ねた。

「どうしたね？」

「先生！ 邪神がつ、祠から黒い邪神が！」

「……邪神？」

一体何の事かと、森に続く小道の先に視線を向けたゼシャールドは、そこに現われた人影を見て眼を瞠まはる。

「黒……じゃと？」

ビクリツと肩を震わせたスンは恐る恐る振り返り、森の入り口に立つ『黒い髪を持つ者』を認めると慌ててゼシャールドの背中に隠れた。

神技人は身に宿す神技によって、髪や瞳に加護を受ける神の色が顕れる。

炎の神『ヴォルナー』の加護を受ける『炎技の民』は赤。

水の神『シャルナー』の加護を受ける『水技の民』は青。

土の神『ザッルナー』の加護を受ける『土技の民』は黄。

風の神『フォルナー』の加護を受ける『風技の民』は緑。

四大神の加護を受けていない『無技の民』は白。そして、『黒』は邪神像に使われている『災厄』の色だった。尤も、無技の祠に祭られている邪神像が黒色であったが故に、そのようなイメージで伝わっているだけという部分もあるのだが。

少なくとも、ゼシャルドはこれまで生きて来た五十二年の間、邪神研究をしながら色々な国々を巡った三十年余りの旅の中でも、黒い髪と瞳を持つ人間など、一度も見えた事は無かった。

己が身に宿る神技の力を呼び起こしながら、スンを庇うように一歩前に出たゼシャルドは、油断なく黒い髪の人物を見据える。

「お主、何者じゃ」

先程の少女を背に庇いながら、警戒を滲ませた様子で誰何を投げ掛ける精悍な顔付きをした初老の男性に、悠介はなんと答えようかと迷っていた。敵意を感じる程ではないが、明らかに友好的とは言えない。

少女の事で何か誤解をされているのかもしれない。そう思った悠介は、とりあえず怪しい者では

ない事を伝えようと口を開く。

「えーと、俺は田神悠介と言います。一応日本人です。あの……言葉は伝わってると思っただけど」

「うむ、ちゃんとした共通語じゃ。タガミユースケ……お主の名前じゃな？ ニホンジンとは、種族の事かの？」

共通語を話していると言われて疑問符を浮かべた悠介だったが、まずは円滑なコミュニケーションを図ることを優先した。日本とは国名である事、自分は日本語を口にしていても事なだを交えながら、自身の身に起きた不思議な出来事を話す。

自身を喚んだ『声』の事から始まって、気が付くとまったく知らない場所に居たという悠介の話は、一般人が聞けば荒唐無稽で頭のおかしな者の妄想と斬って捨てられるような内容だったが、ゼシャルドにとっては一笑に付せられるモノでは無かった。

田神悠介——無技の祠から現われた彼は、自らを邪神と認めたのだ。それも異世界から何者かに喚ばれたと言う。

「興味深い話じゃな。しかし、邪神とは……」

「あ、俺普通の人間ですんで」

「んん？ お主今、邪神として喚ばれたと」

「いや、だから……声がそう言っただけで、俺自身は本当にただの人間ですから」

悠介とゼシャルドが話をしている間、スンはずっとゼシャルドの背中に隠れていた。

「それで、お主はこの世界に災厄をもたらすのかね？」

「寧ろ俺が災厄を被^ひつてる状態なんですけど……」

ある程度の事情を聞き、悠介自身は危険な人間では無さそうだと判断したゼシャルドは、一旦彼をルフク村まで連れ帰る事にした。スンが青褪^{あおざ}めてプルプル首を振っていたが、ゼシャルドは「彼は大丈夫だから」と諭して彼女を先に村へと帰らせた。

村までの道中、何故悠介が邪神として喚ばれたのか、悠介自身にその気は無くとも、この世界に何らかの災厄をもたらす要素を持つていないか等について、二人は互いに質問と返答を繰り返し、疑問と推察を重ねながら村へと続く田舎道を歩いて行った。

「ワシ等では治癒できない病気を患っていた場合も、伝染すれば立派な災厄じゃからなあ」

「至って健康であります」

元々あまり社交的ではない性格の悠介だったが、珍しい研究対象に出会えて上機嫌のゼシャルドと掛け合いのような会話を続ける内に、随分と打ち解けていた。相手が親しみ易い話の分かる年輩者であった事も、悠介の心に安心感を与えたのだ。

異郷の地に単身放り込まれた現状に在って取り乱す様子も無く、終始落ち着いていた対応を見せる悠

介に、ゼシャルドは気さくに話しかけながらも、内面では警戒を怠らないよう注意深く観察していた。異世界から来たという話も、まだ結論は保留中である。

「しかしこの服は……もう少しどうにかならないかな」

お供えモノの服を纏^{まと}っている悠介は似非古代人な自分の格好を嘆く。ゼシャルドの服装を見ると、下は緑色の混じった厚生地のズボンに茶色のブーツ、上はゆったりした感じの白いシャツにマントのような上着を羽織っている。

西洋の中世貴族っぽい雰囲気だが、実に『普通の格好』なのだ。似非古代人な格好で並び歩くのは少々浮いていて恥^はずかしい。

「せめて普通のズボンとシャツが欲し——」

服を掴^{つか}みながら言いかけて突然立ち止まる悠介。二、三步進んだ所で気付いたゼシャルドが何事かと振り返る。どこか焦点の合っていない呆然とした表情で立ち尽くしている姿に、ゼシャルドは少し警戒を深めた。

「どうしたね？」

「俺、やっぱ夢でも見てるのかな……」

「ほほ、ではワシ等は君が見る夢の中の住人かね？」

悠介はゼシャルドの洒落た返答に反応する余裕もなく、目の前にあるモノを呆然と見詰めている

た。正確には『目に浮かぶ映像を』だ。彼の目には見覚えのあるワイヤーフレームで組まれたシンブルなレイアウトのメニュー画面が映っていた。

あの不思議な声に喚ばれる直前までプレイしていたゲームの目玉要素『アイテム・カスタマイズ・クリエイトシステム』、そのメニュー画面である。カスタマイズするアイテムの欄内には、今自分が着ている服が実写3Dでクルクル回っていた。

そして、唐突に思い出して腑に落ちた事が一つ。

「ああっそうか！ あのチャイム音、カスタマイズ出来るアイテムが手に入った時の音だ！」
なんだか一人で手を打って納得している悠介に、ゼシャルドは首を傾げる。

「ふむ……ワシには君の言っている事の半分も理解できないのだが……。何か思い出したのかね？」

「あー、ちょっと待って下さい」

画面の向こうに困惑顔のゼシャルドを見ながら、悠介は目に浮かぶメニュー項目を操作する。

服の色や形、丈等も変更する事が出来て、身に着ける物としての性能もパラメーターの脇にあるスライダーを操作する事で大まかに設定可能。一つ一つの要素をさらに細かく弄る事も出来る。ほぼゲームと同じ仕様らしい。

「カスタマイズポイントの項目が無いって事は無制限に弄れるのか……？ チート仕様かよ」

どこに焦点を合わせているのか分からない眼をして、何やらぶつぶつと意味不明な言葉を呟きな

がら指を宙に彷徨^{さまよ}わせる様子は、傍から見ていると実に不気味である。しかし、ゼシャルドは悠介から何か神技に似た力が行使されている事を感じ取っていた。

(……何をする気じゃ、タガミユースケ)

お供えモノの服は生地がたっぷりあるので、シャツにする部分とズボンにする部分とに分割して、それぞれ形を整えていく。ゲームでもNPCショップで買った無地の服をプレイヤーの好みにカスタマイズしてキャラクターに着せる事が出来た。

ついでにと下着も作っておく。ポジションが定まらないと落ち着かないのだ。

「よし、こんなもんか………実行」

夢中になってカスタマイズ画面を操作していた悠介は、これがただの幻覚だったりしないかという怖い想像に一瞬の逡巡を見せつつ、何も起きなければ起きないで別に困る事は無いと、メニュー項目の実行ボタンを押してカスタマイズを反映させる。

ふわりと、光のエフェクトが悠介を包み込んだ。

「っー」

「なっ、お主………！」

お供えモノの服は、グレーのシャツと黒っぽいズボン、紺のブリーフ風下着にそれぞれ変化した。「きゃあああああああ」



光のエフェクトが収まると同時に、少女の悲鳴が響き渡った。羞恥に染まる顔を両手で覆ったスンが、白い髪を靡かせて走り去る。ゼシャルドの事が心配になつて様子を戻つて来たスンは、光と共に現われた邪神の『シン・ボル』を直視してしまつたのだ。

「あー……」

「また悲鳴つきで逃げられた」と、豊かな自然に囲まれた田舎道のご真ん中で、悠介は深く溜め息を吐いた。素っ裸で。

「そうかー、着てる服にカスタマイズ反映させたら装備外れるんだから、実際はこうなるよなー。」

「ハハハ……」

乾いた笑いをこぼしながら、のそのそと地面に散らばる服を拾い上げては身に着けていく悠介に、ゼシャルドは今し方彼が見せた神技らしき現象について訊ねた——スンの事はひとまず村に戻つてから対処する。

「今のは何だね？ 神技のような力の波動を感じたが、服の仕立てを一瞬の内に作り変える技なぞ聞いた事もないぞい？」

「神技？」

首を傾げる悠介に、どうやら本当にこの世界の人間では無いらしいという確信を深めたゼシャルドは、とりあえず村までの道中でこの世界の常識について話し、村で落ち着いてから彼の話を詳

立ち読みサンプル はここまで

しく聞こうと考えた。
「うむ、まずは何から教えようかの」

3

「あれがルフクの村じゃよ」

ゼシャルドが指した道の先には、木造の小屋が密集するように雑然と並び立っている。村民六十世帯、約二百四十人というそこそこの規模の村だ。村の向こう側には広大な平地が広がっていた。「あそこには無技の民って人達が住んでる訳ですか」

「うむ。さっき話したかもしれないが、ワシはあの村で水技の民として医者をやっておる」

神技人が支配者としてではなく、住人として無技人の村に住むのは、あまり一般的な事では無いという話も教えつつ、ゼシャルドはここまでの道中で説明した神技人や無技人についての御復習おさらいをする。

大多数の人々は世界を創造した四大神の加護を受ける民、神技人として神の力である神技を宿している。その力を以ってカルツイオの大地に君臨し、世界の隅々まで支配しているのだ。

神技を宿していない無技人は少数であり、一部では人の姿をした家畜程度に見られている。

「家畜は酷いっすね」

「神技を宿す者と宿さぬ者とは、それ程に力の差があるという事じゃ」

四大神の神格を軸にした等民制度によって、神技人の中でも身分は明確に分けられており、同じ街の中でも住める区域が決まっている。炎技の民が高等神民として最も高い身分にあり、水技の民と土技の民は中等神民、風技の民は低等神民となっている。

また神技人の名前には自分の属する神の名の最初の部分が必ず入り、他の神の名が入る事は無い。

「まあ、主に武力としての神技の強い者が上に居るといわけじゃな」

「なるほど」

未知の世界であるカルツイオの一般常識など一度には覚えきれまいと配慮したゼシャルドが要点を絞った講義をしてくれたお陰で、悠介もこの世界の仕組みをスムーズに覚える事が出来た。

「大まかに理解したなら、後は生活をしながら追々学んでいけば良い」

「お世話になります……」

突然喚ばれたこの世界において右も左も分からない悠介は、先程のカスタマイズ能力に関する研究も兼ねて、当面の間ゼシャルドの家で厄介になる事になった。